



〔水戸の先達〕より転載

明治元年(1868)－昭和33年(1958)。水戸三ノ町〔水戸市城東〕に水戸藩士酒井捨彦の長男として生まれ、後に母方の親戚横山家の養子となる。本名は秀麿。父の仕事の関係で東京に転居、中学校卒業後、英語学校で英語を学ぶかたわら絵画塾に通う。東京美術学校〔東京芸術大学〕が開校すると1回生として入学、岡倉天心らに学ぶ。卒業後、校長であった天心の勧めで古美術の模写の仕事に携わり、その後、東京美術学校の助教授となる。天心が美術学校を追われると行動をともにし、日本美術院創設に参加する。経済的に行き詰まり、五浦〔北茨城市〕に移転。線のない大胆な描法で名をあげ、それは「朦朧体」と称された。昭和12年(1937)、文化勲章受賞。昭和29年(1954)には茨城県名誉県民に推される。

「戦が始まって、家が焼けたらたいへんだ。どこか安全な所はないだろうか。」
 藩内の意見対立から2つの勢力が激しく対立し、これまでもくり返されてきた戦が、水戸城下で、また今にも始まりそうでした。水戸三ノ町〔水戸市城東〕に住んでいた酒井捨彦は、もしものことを考えて妻の寝ているふとんを家の裏にある竹林に移しました。その竹林で生まれたのが横山大観です。

11歳の時に父の仕事のため東京で暮らすようになり、中学校を卒業すると、英語学校に入学します。英語を学ぶかたわら、絵を描くことも好きだったので、絵画塾にも通いました。このことが絵画の世界に入るきっかけとなったのです。21歳の時には母方の親類である横山家を継ぐことになり、英語学校を卒業すると、東京美術学校〔東京芸術大学〕が開校すると聞いて、今度は絵を本格的に勉強しようと考えました。

大観は東京美術学校を受験し、毛筆画で合格しました。しかし、父は大反対でした。そこで大観は、教科書の挿絵や図、地図などを描いて、そのお金を学費にあてました。卒業するまでこの仕事を続けました。

東京美術学校を卒業すると、古美術の模写の仕事をし、その後、京都美術工芸学校〔京都市立芸術大学〕の教師となります。そのころ大観は、(今までは本名で絵を描いてきたけど、何かよい号<画家としての名>はないだろうか。)と考えるようになり、お経の中から「広くすべてを見通す。」という意味の「大観」を選び号にしたといわれています。

一年ほどで東京に戻った大観は、母校の東京美術学校



〔流燈〕(茨城県近代美術館蔵)

の助教じょきょうじゆ授となります。そして、明治30年(1897)の日本絵画協きようかい会の第2回共進きようしん会に「無我むが」という作品を出品すると、大好評こうひやうを得ました。

しかし、翌31年(1898)、東京美術学校の内紛ないぶんにより、校長あかくらてんしんの岡倉天心(P.7 参照)が学校を追われると、大観も学校をやめて、天心らと東京谷中やなか〔東京都台東区〕に日本美術院をつくりました。大観がその第1回展覧会てんらんかいに出品した「屈原くつげん」という作品は評判となり、全国的に横山大観の名が広まることになりました。

(今まで日本画というのは、古いものとして、あまり評価ひやうかされなかった。なんとか日本画を近代的な絵画として発展はってんさせたい。そのために、日本画に描かれている線を取りのぞいてみてはどうだろうか。)

こう考えた大観は、線ではなく、色彩しきさいが大切だと考え、思い切って線のない描き方を始めたのです。しかし、それらの作品は「朦朧体もろうたい」などといわれ、非難ひなんされました。それでも大観は日本画の発展のためにと大観らしい描き方を続けました。しかし、大観自身も日本美術院そのものも経済的に苦しくなり、明治39年(1906)、日本美術院は茨城県の五浦いづら〔北茨城市〕に移ることになりました。大観の五浦での生活は苦しいものでしたが、「流燈りゅうとう」などのすばらしい作品を描きます。

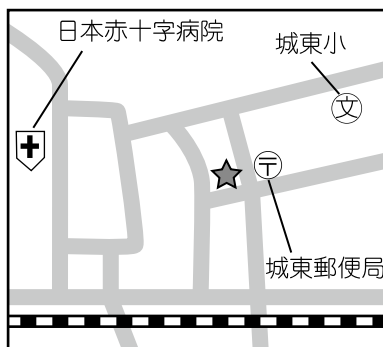
師である天心が亡くなると、大観は日本美術院の中心として、東京での日本美術院の再興さいこうに努めてこれを實現じつげんするとともに、「生々流転せいせいりうてん」などの雄大な作品を完成させました。自分に厳しく、一作一作を真剣しんけんに精魂せいこんこめて描いた大観の作品は、現在げんざいでも多くの人たちの心をひきつけています。

ゆかりのスポットに行ってみよう

横山大観せいたん生誕の地

所在地 水戸市城東2-51

内容 生誕の地には、横山大観ぎやうせきの業績しやうかいを紹介する説明版、銅像どうぞう、生誕の地の記念碑きねんが建っています。



おもな
参考文献

『横山大観傳』(茨城県・1959)

『20世紀茨城の群像』(茨城新聞社・1999)